

ベトナム訪問記

ベトナム雑感

学校法人 中村学園

理事長 中 村 量 一

甲斐学長から、今回のベトナム調査訪問についての報告書を書くように依頼があった。

しかし、筆者は調査団に同行はしたが調査員としてではなく同伴旅行者として無理を言って帯同させて頂いたのである。したがってこの文は報告書ではなく単なるベトナム雑感であることをお断りしておかねばならない。

そもそも、何故ベトナムを訪問したかったのか。一つは小学校時代の子供向けのラジオ番組、題名は忘れてしまったが、流れてくる主題歌の中に『^{ルソン}呂栄、^{アンナン}安南、カンボジア』という歌詞があり、子供心に「行ってみたいな」との思いがあり、郷愁としてしっかりと今日まで安南（ベトナム）が心の隅に残っていたことである。次に比較的まじめな理由としては、近年日本とベトナムの経済交流が盛んになり関心が高まっていたところに、以前からお付き合いがあり流通科学部でも企業論特講の講師としてお世話になっている“やずや”の矢頭美世子会長が「九州ベトナム友好協会」を立ち上げられ、勧められて本学園も会員となった関係で、「一度はベトナムに行っておかねば」という気持ちがあったからである。

以下紀行文的に記す。

8月21日（日）、チャイナ・エアラインにて台北経由ホーチミンに向かう。現地時間16時30分無事到着。着陸前に機中から見た景色は、山影はまったく見えず川と湖沼ばかりが目立っただっ広い平野であった。ホテルで旅装を解き、夕食は前アメリカ大統領ビル・クリントンも立ち寄ったレストラン（と言うよりもラーメン店風情）にてベトナム名物フォーを食す。おいし

かったが香草の香りがきつく、辛子は非常に辛かった。食後ホテルに帰り、サイゴン川畔へ散歩に出かけたが、大きな道路にもかかわらず横断歩道もなく、この国の人たちはバイクと車が猛スピードで走る中をスイスイと渡っていくが、慣れない我々は横断するのはまさに命懸けであった。その後ホテル近くのショッピングセンターのカフェにて若手の先生方とスパークリングワインとこの国の特産物ベトナムコーヒーを飲む。スパークリングワインはボトルで916千ドン、日本円換算3,500円弱であり銘柄にもよるがほぼ日本並み、他の物価が極端に安いだけに高く感じた。

二日目からは先生方のフィールドワークに同行、朝からチャーターのワゴン車で移動し、アンジャン省へ向かう。途中の高速道路は日本のように高架ではなく単なる中央分離帯がある大きな道路で、歩行者のための高架歩道橋もなく猛スピードの車の間を縫って人が横断するので、昨夜とは逆に車に乗っていてハラハラする。途中フェリーにてメコン川（支流？）を横断、豊かな水量と意外に早い流れに驚く。昼過ぎに目的地に到着、先生方は現地の日系穀物商社、アンジメックス・キトク（木徳）社にて日本人支配人からベトナムのコメ事情について聞き取り調査並びに意見交換をする。調査を終え再び車で移動、カントーに向かう。約2時間後夕刻前に到着、ホテルチェックインの後、現地の比較的大きなスーパーを視察、商品が豊富に陳列されているのに驚く、たとえば子育て必需品の粉ミルクはもちろん、コーヒー、チョコレートといった嗜好品まで種類が多く、食料品もシェウ

マイ・餃子などの冷凍食品類まで豊富であった。(ということは各家庭に冷凍冷蔵庫が普及しているのか?) その後、魚市場に隣接した主に食品や農作物関係の小売商店と路上販売が一体となっているエリアを散策する。夕方の時刻で商店と路上販売はにぎわっていたが、魚市場は21時頃から魚が入荷するとのことで翌日出直すこととした。

三日目は6時前に起床、早朝からボートをチャーターし大きな川を30分程下り、流れのある川面で展開している水上卸市場の視察。この水上マーケットは農作物の大卸が主体で、20トン前後の小型船が、スイカであるとかパイナップルなどの果物、カボチャやニンジンといった野菜を産地から運河や川を利用して運搬して来て、そのまま川の中に停泊し卸売店となっていた。小売商であるお客は小舟で船縁に乗り付け価格交渉をしている。卸の船には遠目にも取扱商品が分かるように舳先に取り扱い商品(果物や野菜)を吊るしてあったのが面白かった。ここで農作物を購入した小売商は、さらに川を利用して自分のテリトリーに帰り、直接小売をし、あるいは一部路上の小売店に卸しているものと思われる。非常に興味深かった水上マーケットの視察を終え、陸上に戻り車で国立カントー大学へ、午前中は経済学部、午後は農学部を訪問する。ベトナムでは8月から新学期とのことでキャンパスには学生が溢れていた。年中暑いためか特にこの季節を夏休みとしていないのであろう。将来の交流目的で訪問するも、ホーチミン市からのアクセスが悪く、この点が交流検討の際のネックとなりそうである。夕食後魚市場を視察、魚市場は川に面しており、一部はトラックで入荷していたが海の魚も含めほとんどは船で運ばれてきていた。21時過ぎには引き上げたが日が替わってからのほうが活気が出るのであろう。

四日目は午前中にホーチミン市に隣接する南サイゴンへ移動、南サイゴンは新興商業都市でビジネス街には新築のオフィスビル、メイン道

路沿いにはカーディーラーが軒を連ねていた。BMW やベンツにはそう驚かなかったが、さすがにボルシェ販売店を見つけた時には、この国にもすでに超高級車を購入できる層が存在するのだと驚かされた。驚いたことと言えば、オフィス街のレストランにて昼食をとっていると二階から大きな歌声が聞こえてくる。覗いてみると二階はカラオケルームになっており、食事を終えたビジネスマンやオフィスレディが声張り上げて歌っていた。日本にはない習慣である。昼食の後、海産物の加工工場へ、ここでのレポートも先生方へ譲ることとする。ただ日本の指導の結果であろうが、工場内の衛生管理は徹底しており日本と同レベルと思われたことと、経営者が最大輸出先である日本の大震災以降の景気について大変心配しておられたことが印象に残った。その後ホーチミン市へ戻り夕食の後、市内No.1のホテルの屋上カフェにて先生方と最後の夜を楽しみ一人空港へ、先生方のこの先の調査研究の成果が上がることを念じながら、ベトナム航空福岡ノンストップ便にて一足先に帰国の途に就いた。

以下に今回の旅行で感じたベトナムの印象についてランダムに述べる。

まず第一に、最初の入国審査の時の公務員の無愛想な表情に、「社会主義の国に来た」と感じたがその後はほとんどその様な印象は受けなかったこと。次に、ベトナム人は勤勉と聞いていたが低所得者層では女性は確かに勤勉と思えるが男性は決してそうは見えなかったこと。路上で目につく男性は将棋みたいな遊びに熱中しており、たぶん力仕事はなければ出番なしといった風であった。単なる想像であるが、これは労働意欲の問題というより、ある意味金銭欲の問題かもしれない。第三には、やはりインフラ、特に道路あるいは軌道交通網の整備の遅れであり、この原因の一つに水上輸送の利便性があると思われる。そして改めてメコンデルタの平坦にして広大、大小幾重にも繋がる河川の存在、

この環境のおかげで食料の確保という観点からは実に恵まれた地域と言えと感じたことであつた。他に近年ベトナムに限ったことではないが日本の存在感（主として看板やTV コマーシャルからの印象ではあるが）があまり感じられなく、ここでも韓国の勢いを感じたことである。印象とは違うが、『有難う』はベトナム語で『カムオ』と言ひ、これは漢字の『感恩』に由来していると聞いた時、本学の建学の精神の中の『清節、感恩、労作』に繋がるものがあり、ベトナムに対して改めて親近感を覚えた。

最後に我々の通訳を引き受けてくれたベトナム

人アン氏に感謝したい。彼はもちろん日本語は達者であるが、他に仏語、英語も身につけているらしい、いわゆるマルチリンガルである。驚くのはこれほど日本語が達者であるのに一度も来日の経験がないということである。彼の高い教養と遠慮深い態度にベトナム人の知識層の良い面を見ることが出来た。その他今回の限られた方々との出会いの中ではあるが、ベトナムと日本、将来にわたって経済面のみならず文化面、さらに安全保障も含めて友好を図ることの必然性を確信した旅行であつた。